エッセイ

古典に見えるマルメロあれこれ

水谷　智洋

マルメロ ── どこか異国風で、それでいてなにか郷愁をさそうようなひびきのするこの語を、『日本国語大辞典』（小学館、1975）は次のように説明しています。

> マルメロ【榅桲】《名》（ポルトガルmarmelo）バラ科の落葉高木または低木。ペルシア、トルキスタン原産で、長野県諏訪地方などで栽培される。高さ3〜8メートル。・・・春、枝端に白または淡紅色で経5センチメートルぐらいの五弁花を開く。果実はセイヨウナシ形またはリンゴ形で黄熟する。果実には芳香があり甘酸っぱい味がして生食したり砂糖漬やジャムにされる。・・・

実を言えば、私はカリンならよく知っていて、果実酒をつくったりもするのですが、マルメロとなると、見かけはカリンとあまり変わりなさそうに思えるのに、見たことも触ったこともありません。そんな訳で、かねてより、マルメロの実がたわわに（？）実っているであろう秋の信州探訪をと念願していたところへ、たまたま手にしたAndrew Dalby, *Food in the Ancient World from A to Z*（Routledge, London & New York, 2003）にQuinceの項目を見つけて心が動きました。実地見学のかわりに古典探索を、という筋書きです。以下は、Dalbyの書物に引かれた典拠を主な手がかりとして調べてみた古代人のマルメロに関する記事の集録です。それらは、大体、年代順に並んでいますが、ただし、決してexhaustiveではないことを予めお断りしておきます。

(1) Alkman *P.M.G.* 99 [1)]

Κυδωνίων δὲ μήλων μνημονεύει ... Ἀλκμάν.
キュドーニアーのリンゴ(=マルメロ)に･･･アルクマーンは言及している。

これはアテーナイオス Athenaios（2〜3 世紀）の *Deipnosophistai*『食卓の賢者たち』(3. 81D) に見える語句で、たぶん、マルメロ Κυδώνια μῆλα の文字が出る最古の文献です。文献学者はこのような片言隻語にすら、前 7 世紀の抒情詩人アルクマーンの「断片 99」と番号をふるのですが、マルメロが彼のどんな詩の、どんな場面で歌われているのかは、一切不明です。なお、キュドーニアーΚυδωνία は、クレーテー（クレタ）島北西部の町の名です。[2)]

(2) Stesikhoros *P.M.G.* 187 [3)]

πολλὰ μὲν Κυδώνια μᾶλα ποτερρίπτουν ποτὶ
　　δίφρον ἄνακτι,
πολλὰ δὲ μύρσινα φύλλα
καὶ ῥοδίνους στεφάνους ἴων τε κορωνίδας οὔλας.
（人々は）キュドーニアーのリンゴを沢山、主君の
　　二輪馬車に投じた。
沢山のギンバイカの葉も、
またバラの花冠と編んだスミレの花輪をも。

これも(1)と同様、アテーナイオスの同じ箇所にあるもので、実は(1)の μνημονεύει のあとに Στησίχορος ἐν Ἑλένῃ οὕτως· とあって、上記 3 行の詩が引かれているのです。前 6 世紀前半の抒情詩人ステーシコロスのこの断片については、Campbell が、『ヘレネー』という詩の題名から推してでしょう、ヘレネーとメネラーオスの婚礼を歌ったもので、「主君」とはメネラーオスを指そうと注記しています。[4)] もしそうだとすれば、新婚の夫婦にマルメロを投げるのは、二人が子宝に恵まれますようにという人々の願いが込められていると推測されます（この点はプルータルコスの項で言及されるはずです)。

(3) Ibykos *P.M.G.* 286

ἦρι μὲν αἵ τε Κυδώνιαι

μηλίδες ἀρδόμεναι ῥοᾶν
ἐκ ποταμῶν, ἵνα Παρθένων
κῆπος ἀκήρατος, αἵ τ' οἰνανθίδες
αὐξόμεναι σκιεροῖσιν ὑφ' ἔρνεσιν 5
οἰναρέοις θαλέθοισιν· ἐμοὶ δ' ἔρος
οὐδεμίαν κατάκοιτος ὥραν.
.....

春ともなればマルメロの木が、
川の流れにうるおう
処女らのけがれなき
園生に、花開く。また、陰をなす
若枝の下に育つ 5
ブドウの花も。だが私の恋心は、
季節を問わず、休むことを知らぬ。
.....

前6世紀の抒情詩人イービュコスのこの詩は、これまたアテーナイオス（13. 601B）に引かれているものです。καὶ ὁ Ῥηγῖνος δὲ Ἴβυκος βοᾷ καὶ κέκραγεν·「またレーギオン（南イタリアの町）の人イービュコスは叫び、喚く」との前置きのあとで、14行が伝わっていますが、その前半のみを上に掲げました。

ところで、この詩で興味深いのは、3行目の「処女ら」をCampbell[5]も、アテーナイオスの訳者 C. B. Gulick[6] も、'nymphs' と解していることです（Παρθένων と頭文字を大文字にしているのはそのため）。とすれば、ここでブドウにさえ先んじて名指しされているマルメロは、ニンフたちが、春にはその白または淡い紅色の花を、秋には芳香を放つその黄色い果実を愛でる樹木、いうなれば森のニンフたちの聖木として、その「けがれなき園生」に植えられていた、とは想像が過ぎるでしょうか。ちなみに、『オデュッセイア』第7巻に出る伝説的なスケリエーSkherie島のアルキノオスAlkinoos王の果樹園では、梨、ザクロ、リンゴ、イチジク、オリーヴ、ブドウが栽培されていますが、マルメロは出てきません。とはいえ、120行のμῆλονは、必ずしもリンゴとは限らず、マルメロを指しているかもしれません。なにしろ、この語は 'any tree-fruit'（L-S-J, s.v. μῆλον (B)）を意味し得るからです。

(4) Aristophanes, *Akharnēs* 1108-9

ἀτταταῖ ἀτταταῖ
τῶν τιτθίων, ὡς σκληρὰ καὶ κυδώνια.
やれ、やれ
この女子（おなご）どもの胸はえろうむっちりして
マルメロを思わせるわ。[7]

アッティカ古喜劇の大詩人アリストパネースの『アカルナイの人々』(前 425 年のレーナイア祭 Lenaia で優勝）中のセリフです。発言者はこの芝居の主人公のディカイオポリス Dikaiopolis、すっかり酔っぱらった彼が、自分を支えてくれる二人の白拍子に投げかけることばです。これが、たぶん、私とギリシア古典中のマルメロとのはじめての出会いでした。当時の私が少なからぬ感銘（？）を受けたであろうことは、想像に難くありません。もっとも、アリストパネースの作品には、女性の乳房をリンゴになぞらえる例が 2 度見られます。*Lysistrate*『女の平和』(前 411 年）155－6 行の τᾶς ʽΕλένας τὰ μᾶλα ... γυμνᾶς「裸のヘレネーの玉のお乳」(高津春繁訳)、*Ekklesiazusai*『女の議会』(前 392 年）901－3 行の τὸ τρυφερὸν γὰρ ἐμπέφυκε ... κἀπὶ τοῖς μήλοις ἐπανθεῖ「嬌（なまめか）しさは･･･両の乳房に華（はな）と咲く」(村川堅太郎訳）がそれです。ただし、いずれも女性が女性に向かって発するセリフである点が物足りない、と評する向きがあるやもしれません。

(5) Kantharos 1. 765K

κυδωνίοις μήλοισιν εἰς τὰ τιτθία.
マルメロでもって乳房まで（？）

これは、(1)に掲げたアテーナイオスの語句の直後に、ἔτι δὲ Κάνθαρος ἐν Τηρεῖ·「またカンタロスは『テーレウス』の中で」とあって、引かれているものです。カンタロスは、前 422 年の大デュオニューシア祭 Διονύσια τὰ μεγάλα で優勝したこともあるアッティカ古喜劇詩人ですが、知られていることは少なく、上記の断片もこのままでは意味がとれません。そこで Meineke は εἰς を ἴσα に直して ‘equal to quinces’ と解したのですが、Gulick は ‘it is hardly safe

to accept Meineke's ἴσα'[8]と反対しています。(4)を見たあとでは、ἴσα でもよさそうに思われるのですが・・・。

(6) Hippocrates (?), *Peri Diaites* 2. 50

κυδώνια στυπτικὰ καὶ οὐ διαχωρεύουσιν.
マルメロは収斂作用を及ぼし通じをつけない。[9]

Corpus Hippocraticum『ヒッポクラテース全集』中の『食餌法について』に見出される一文です。この論文が古代医学の大成者ヒッポクラテース（前 460 頃～370 頃）の真作であるかとか、成立年代とかについては、この方面に不案内な私の口出しするところではありませんが、食品としてのマルメロが人体に及ぼす効果に言及した最古の文献と思われます。

(7) Theophrastos, *Peri Phytōn Historias* 2. 2. 5

ἐκ μὲν γὰρ ἀπίων μοχθηρὰ ἡ ἀχράς, ἐκ δὲ τῶν μηλέων χείρων τε τῷ γένει καὶ ἐκ γλυκείας ὀξεῖα, καὶ ἐκ στρουθίου Κυδώνιος.
梨からは劣悪な野生梨が、リンゴからは質が悪く、甘いかわりに酸っぱいものが、またストルーティオンからキュドーニオスが生じる。

テオプラストス（前 371 頃～287 頃）はアリストテレースの高弟で、師の跡を継いでその学園の学頭となった高名な哲学者ですが、「植物学の祖」[10]でもある由です。上記はその彼の『植物誌』中の一文で、実生の果樹はしばしば野生種に戻ることを述べた一節にあります。とすれば、ストルーティオンは品質の良い栽培種のマルメロの木で、キュドーニオスが野生種と読めますが、この野生種ははたして劣悪な品種で、芳しからぬ実をつけるのでしょうか。[11] アテーナイオス（3.81D）にある「最良の果実はマルメロ μῆλα κυδώνια、パウリア φαυλία（オリーヴの実の一種）、ストルーティア στρουθία だ、とグラウキデース Glaukides（不詳）が述べている」との一文を見れば、必ずしも、キュドーニオスの実がストルーティオンのそれより劣るものではないようにも思われます。[12]

(8) Phylarkhos, *Historiai* 6

ピュラルコスはその『歴史』第6巻の中で、マルメロ τὰ κυδώνια μῆλα は芳香によって致命的な毒薬の効力さえにぶらせる、と述べている。

これまたアテーナイオス（3. 81E）の文章で、引きつづき前3世紀の歴史家ピュラルコスの実際の文章（*FGrH* 81 F 10）が引用されています。それによれば、ある薬屋が、以前入れてあったマルメロの芳香が残る小箱から毒薬を取り出し、調合して人に与えたところ、全然効かなかったというのです。この薬は τὸ Φαριακὸν φάρμακον というのだそうですが、マルメロの残り香で効果が失せる程度の毒薬なら、もともとたいしたものではなかったのかもしれません。

やっと前3世紀まで来ました。この先はまた別の機会に。

注

1) 断片番号は D. Page (ed.), *Poetae Melici Graeci* (Oxford, 1962) のそれです。D. A. Campbell, *Greek Lyric, II* (The Loeb Classical Library, 1988) も同じ番号を使っています。

2) Cf. Plinius, *Naturalis Historia* 15. 37: mala quae vocamus cotonea et Graeci Cydonia e Creta insula advecta.

3) (2)と(3)の断片は、Campbell（注 1）では *III*（1991）におさめられています。断片番号は、やはり、*P. M. G.* と同じです。

4) D. A. Campbell, *Greek Lyric Poetry*, A Selection (London & New York, 1967), pp.257－8.

5) Ibid., p.310.

6) C. B. Gulick, *Athenaeus, The Deipnosophists, VI* (The Loeb Classical Library, 1970), p.239.

7) アリストパネースの訳文はすべて『世界古典文学全集 12　アリストパネス』（筑摩書房、1964）所収のものです。

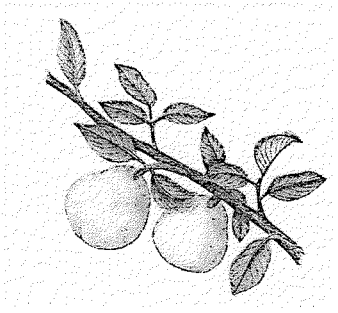
8) Gulick（注 6）, *I* (1969), p.350.

9) 訳文は『ヒポクラテス全集　第 2 巻』(エンタプライズ、1987)、218 頁の近藤均氏のものです。

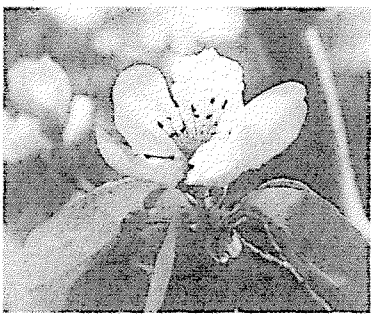
10) 『新潮世界文学小事典』(1966) の「テオプラストス」の項 (575 頁、池田英三氏執筆) に依っています。

11) 大槻真一郎・月川和雄訳『テオフラストス　植物誌』(八坂書房, 1988) の巻末の「植物名索引」16 頁のマルメロの項には、「(3) (στρουθίον) 野生種」とありますが、これが正しいのでしょうか。

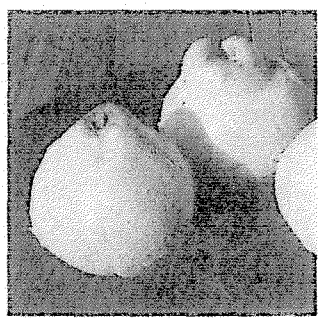
12) なお、テオプラストスのこの一文に Campbell (注 1, p.465) は、'Theophrastus implies that the quince (Cydonian apple) is an inferior kind of *struthium*, which may be a medlar.' と注記しています。medlar とは「セイヨウカリン」と辞書にありますが、このあたりのことは私には判断がつきかねます。



マルメロ *Cydonia oblonga* Mill.



花　5 月下旬　駒ヶ根市



果実　11 月上旬　立川市

『樹木大図鑑』(北隆館, 1991)、158 頁より